氣賀澤保規編著

『隋唐洛陽と東アジア
――洛陽学の新地平――』

塩沢裕仁

本書は、二〇一八年三月に京都大学にて行われた「隋唐洛陽と東アジア」と題する国際シンポジウムにおいて発表された基調報告を含む研究報告十九本の内の十四本を収め、これに編者の氣賀澤保規氏（以後編者と記す）の序論と寄稿二本を加えてまとめられた論集である。本書の副題に「洛陽学の新地平」と、帯に「洛陽という視座から問う中国史：中国史に重要な位置を占め、日本とも関係浅からざる洛陽。この地で展開した政治、都城、宗教などの諸問題をめぐる日本・中国の最新成果を通じて、「洛陽学」を提唱する画期的論文集」とあるように、二〇一〇年に編者が提唱した「洛陽学」を基調とするシンポジウム（第二回目）の論集である。

第一回目のシンポジウムは「東アジアにおける洛陽の位置」と

題するもので、評者もこれに参加しているが、時代や分野を超えた多くの研究者が参席していた。これに対し、第二回目のシンポジウムでは本書の表題にもあるように時代を隋唐に絞って行っている。また第一回目が東京・関東地区の研究者が主体であったのに対し、第二回目は京都・関西方面の研究者が主体となっているという点での違いもある。千年の帝都と称されるごとく洛陽の歴史の長さは他の比ではない。では二回目において何故に時代を限定し、研究分野を石刻資料や宗教関係に絞ったのか、その真意は二回目に参加していない評者には測りかねるが、本書に係る研究題目（科研費基盤研究（B）「隋唐「仏教社会」の多元的構造の解明と東アジア文化論の構築」に沿ったものであることは理解されよう。視座は萎縮してしまったが、隋唐洛陽という視座においてとらえることのできる様々な問題に向き合い、隋唐時代を中心とする洛陽の諸問題が映し出されたという点で、隋唐史を論じる上には必携の論集であることは言を俟たない。

本書は大きく二部に分けられ、第Ⅰ部が「政治社会史上の洛陽」、第Ⅱ部が「宗教空間からの洛陽世界」となっており、これに序論として編者の「隋唐洛陽学の意義と課題」が加わる。ここでは、まず本書の全体構成を示し、つづいて個別の論考について概要と評者の所見を簡述する。

全体構成は以下のようになっている。

序論

氣賀澤保規「隋唐洛陽学の意義と課題」

第Ⅰ部　政治社会史上の洛陽

①川本芳昭「北魏の洛陽遷都と孝文帝の改革―改革の中国史上に占める位置をめぐって―」

②夏炎「北魏洛陽における権貴勢家第宅の奢侈の風始末と孝文帝の遷都改革」

③氣賀澤保規「煬帝大業十一年の洛陽大朝会とその背景―隋末政治史の一側面―」

④佐藤文子「複都制再考―八世紀日本の造都と天皇権から考える―」

⑤速水大「安史の乱における突厥王族阿史那氏の動向―洛陽出土「大燕阿史那明義墓誌」とその関連資料を中心に―」

⑥竹内洋介「「党争」の残照―李徳裕の洛陽帰葬とその周辺―」

⑦松本保宣「隋・唐・五代洛陽宮の政治空間について」

⑧毛陽光「墓誌からみる唐代洛陽の万安山」

第Ⅱ部　宗教空間からの洛陽世界

⑨北村一仁「寺院・摩崖・石窟の位置からみた交通路―北朝後期～隋代、洛陽より東南へ―」

⑩宮嶋純子「北周末より唐代初期における洛陽仏教の動向」

⑪孫英剛「流動する政治景観―「昇仙太子碑」と武周・中宗朝の洛陽政局―」

⑫大西磨希子「則天武后の明堂と嵩山封禅―「大雲経疏」S六五〇二を中心に―」

⑬王慶衛「新出「岩和尚墓誌」に見る唐代洛陽の天宮寺」

⑭雷閃「唐代洛陽大聖真観考」

⑮榎本淳一「龍門広化寺善無畏三蔵真身考―中国唐末～北宋期におけるミイラ信仰について―」

特別寄稿

⑯黄婕「日本の洛陽研究に関する一考察」

冒頭、本書の編者である氣賀澤保規氏の序論に、日本洛陽学国際シンポジウムの開催に至る経緯と背景、そして第二回目の題目選定の趣旨説明が記されている。本書の目指さんとするところは、この序論で十分に説明が尽くされている。編者が発起人となった二〇一〇年の第一回洛陽学国際シンポジウムの開催に触発されるように、二〇一五年には洛陽で国際ワークショップ「洛陽と石刻」が、二〇一六年にはソウルでシンポジウム「古代東アジア石刻研究の新方向」が、そして二〇一七年には再び洛陽にて河南省社会科学院を主体とする「洛陽学国際学術研討会」が相次いで開催された。この内の前者二つは石刻資料研究に関するものであるが、この流れの上において、本書の基礎となる「隋唐時代の洛陽」をテーマとする第二回洛陽学国際シンポジウムが開催されたのである。

では、洛陽というものを考える上で、隋唐洛陽が持ち得る研究の意義とは一体何か。この点は本書の二部構成、すなわち「政治社会史」および「宗教空間」という認識の中で説明されてはいるものの、洛陽を語る上で何故に隋唐という時代でなければならないのか、という点で十分な説明がなされているとはいいがたい。さらに編者は栄新江氏によって先行して唱えられた「長安学」に相対する形での「洛陽学」の位置付けを強調するが、洛陽の歴史や文化を研究する学問が今に至るまでなかったわけではない。それを現地洛陽の研究者たちは「河洛学」と称してきた。その存在を棚上げする形で何故に洛陽という文言を冠する学問を立ち上げる必要があったのか。「洛陽学」を唱える上でさらなる詰めが必要であると評者は考える。この点については、収載された各論考について触れたのち、改めて言及したい。

以下、各論考（紙幅の都合上以下各氏の題目を略す）の内容について概要と私見を述べる。

第Ⅰ部　政治社会史上の洛陽

①川本芳昭氏の論考は、「北魏洛陽出土墓誌の理解をめぐって」と「五徳相生と孝文帝洛陽遷都の歴史的意義をめぐって」という二部構成となっている。孝文帝の遷洛後、厖大に作製された墓誌からは孝文帝の改革の一端が理解されるが、では何故に遷洛を機に墓誌は盛行するに至るのか。本論考の前段ではこの点について、孝文帝の漢化と相俟ったもので中華再生を企図する施策の一環という理解を示す。後段では、北魏の支配の正統性を主張するために五徳の変更がなされた点を指摘し、以降の中国王朝における五徳継承はここが分岐点であると説く。また五徳継承が宋金で終焉を迎えることに北魏と同様に異民族である元にも通じるところを示す。歴史のダイナミズムという視座から異民族王朝北魏の歴史的転換点における役割と意義を説いたものといえる。

②夏炎氏の論考は、北魏の奢靡弊風の推移を追い、遷都の背後

にあるものを探り出すことで、北魏後期の政治社会史を垣間見ようとするものである。権貴第宅における奢靡弊風の改革は、孝文帝太和改革の項目の一つとして打ち出され、孝文帝の下では漢化政策に対する支持と畏怖により実行に移されたが、宣武帝以降、中核をなす権貴集団からの政治的支持を必要とすることから奢靡の行為は放任され、結果として奢靡弊風の終焉は制度改革ではなく政変によってもたらされたと説く。北魏衰落の経緯については数多の論考が存在する中、殊更この問題を論じることが北魏史を語る上で一体如何なる意味を持つのか、若干の疑点が評者の脳裏をよぎる。

③氣賀澤保規氏の論考は、大業十一年（六一五）の洛陽大朝会の特殊性に注目し、煬帝自らがその衰落を自覚した上で意図的に挙行した政治的デモンストレーションであったことを説く。その特殊性とは、列席した国や民族の多さには目を見張るものがあるのに対し、地域の偏りや不確定なものが多いこと、また主要な国の名前が見当たらないことなどであり、その特殊性の背景として当該朝会以前における国内各地で発生した動乱と高句麗出兵に関する煬帝の動向を説明している。まことに卓見であり、大業十一年の洛陽大朝会が隋末の政治動向を知る上での一つの鍵となる出来事であることは、本論考をもって認識しておくべきである。

④佐藤文子氏の論考は、保良宮や近年発掘の進む由義宮の造営問題を通して、複都並立の歴史現象をとらえようとするもので、日本における複都制施行の内に、強い政治性を読み取っている。その成果を踏まえて評者が気になったのは、果たして、陪都制と複都制を同じ次元で議論してよいものであろうかという点である。昨今の多大な考古学の成果を背景に、鄭州商城と偃師商城の比定論から発する殷初期からの陪都制の存在問題、甲骨から読み解く殷の都邑に係る問題、殷周交代期の成周成立の問題などが議論されているところであり、何故に中国王朝では陪都が必要なのか、その必要性という点をも踏まえて、陪都制と複都制を同じ次元でとらえることの可否を日本史の立場から議論してもらいたいと考える。

⑤速水大氏の論考は、新たに得られた「大燕阿史那明義墓誌」（洛陽南原から出土）を基に、明義の父で突厥王族に繋がる承休（本論考では永慶に比定）と安禄山より史思明に至る燕国中枢部との繋がりを解明したものである。阿史那氏に率いられた安史軍内の突厥集団の動静解明は史料の制約から進んでいなかったが、当該墓誌の登場により新たな段階に入ったといえる。燕の都としての洛陽の位置付けとそこに突厥人集団がどのように関わっているのかを議論する上で極めて有益な見解を提示している。

⑥竹内洋介氏の論考は、李德裕の洛陽帰葬に焦点をあて、牛李党争の方向性として李德裕の失脚がもたらした顛末、並びに「李燁墓誌」に登場する令狐綯の李德裕洛陽帰葬への関与を通して党争終焉の如何と李派復権の背景を探り出そうとしたものである。唐滅亡の遠因ともいわれる牛李党争に対する党派の構造分析は従来未検証であったが、唐末の中央政界の複雑な人的関係を子細に描出し党派内の構造分析に繋げている点は、唐終末期の理解をより深める成果といえよう。その一方で、李德裕の洛陽帰葬が以後

の歴史的な動きの中で如何なる意味を持っているのか、本論考では明確に示されているとはいいがたい。今後に期すところである。

⑦松本保宣氏の論考は、宋都開封において出現した二本の軸線を有する都市規格の端緒を洛陽に求めるものである。隋唐の洛陽城では西に象徴性としての東周王城の遺址が存すること、禁苑として都城の西隣に西苑が設けられたこと、内朝正殿が東西に配されたことなどの配置構造から生まれる都城の景観に目を向け、南北軸のみならず東西の軸線が隋唐洛陽城に存在したことを指摘する。隋唐洛陽の特異性を論じる上での新たな問題提起としてまことに卓見である。中国都城研究では魏晋以降の都城に対してひたすら南北軸を求める傾向にあるが、漢魏洛陽城や鄴城などにも東西軸の存在を求めていくべきではないかと評者は考えている。中国都城史研究に一石を投じる成果といえよう。

⑧毛陽光氏の論考は、唐代洛陽の都市空間にあって邙山に次ぐ墓葬区となった万安山の景観復元を試みた興味深い成果である。近年高速鉄道が敷設され、洛陽の郊外として開発も進んだ洛陽盆地南縁の万安山山麓に対する新たな研究の方向性が提示されている。明清以降の洛陽においては邙山の存在が傑出していたことから、洛陽の東南に位置する万安山一帯に対する関心は稀薄であった。しかしながら、昨今の後漢・曹魏帝陵区の確認にはじまり、当該区域からは大量の墓誌資料が出土している。万安山山麓は元来洛陽の喪葬文化景観の重要な一面を構成していたことから、万安山から出土する墓誌にも万安山の景色や環境が描述されており、唐代の帰葬地選定の条件と志向性が理解される。今後重要度を増す区域として認識しておかなければならない。

第Ⅱ部　宗教空間からの洛陽世界

⑨北村一仁氏の論考は、摩崖石窟や石窟の所在に着目して交通路と交通景観を導き出すという手法を用い、具体的な研究対象として洛陽から許昌に至る道筋を探究したものである。特に登封近傍の古道について、現地調査をも交え詳細に描出している。本論考では数多の交通路より、北朝から隋という時期に限定し、さらに登封を通り抜ける道筋に限定した考察であった。隋以降、特に唐則天武后の行幸との関係をみるならば、幟幡を通過するものに限らず、龍門から伊川、臨汝を経る道筋も洛陽の宗教空間にとっては欠くことのできないものである。現地踏査を基調としていることから、時代的な幅を広げつつ研究調査の対象地域も拡大されることを期待したい。

⑩唐代における仏教教線の展開については『続高僧伝』や『宋高僧伝』を主たる研究の資料源としてきたが、宮嶋純子氏の論考は、その史料の少なさ故にあまり着目されてこなかった隋から唐初に至る時期の洛陽仏教界の動向を整理したものである。隋末の王世充政権と洛陽仏教界のあり様が唐初の基点となる点、隋代の慧遠など六大徳の招致に合わせ慧乗らの長安招致が洛陽仏教界にとって転換点となった点などが示されており、興味深い。しかしながら、隋を挟んでその前後の状況を概略的にとらえるには有益であるが、問題点を指摘し、それを積極的に論じたものとはいえず、概説的な域を出るものではないのが残念である。

⑪孫英剛氏の論考は、「昇仙太子碑」碑陰の内容を分析することで中宗の武韋集団と睿宗の相王集団との相克状態を浮かび上がらせるものである。「昇仙太子碑」が建立された緱山は、洛陽盆地の東南端に位置し、嵩山の北門ともいえるランドマークで、洛陽における政治・儀礼・宗教空間の重要な構成要素となっている。本論考の目指すところとして、中国中世における政権構造と政治情勢の変遷を「記念碑的」政治景観と位置付ける。一つの成果に達しているとはいえ、〝政治景観〟という用語について今一つ説明が不明解であることから、本論考の目指すところも曖昧となっている。

⑫大西磨希子氏の論考では、『大雲経疏』が『大雲経』の注疏という体裁をとりつつ、武周革命が仏の予言に基づくものとする仏教的符識であるとの認識に立つ。則天武后の皇帝としての正統性は仏教に立脚しており、その正統性を裏付けるものとして用いられたのが『大雲経』である。儒教的儀礼空間である明堂に則天武后が仏教的色彩を加え、仏教行事を持ち込んだとする点は興味深い。明堂の運営と封禅の記事より、それが則天武后にとって正統性を主張する意味を有していたとする指摘は傾聴に値する。

⑬王慶衛氏の論考は、新たに得られた「岩和尚墓誌」に登場する唐代洛陽の天宮寺の所在から洛陽の都市景観の復元を試みたものである。「岩和尚墓誌」は初期禅宗史の史料であり、洛陽の神聖空間の配置状況を表しているとの認識に立つ。本論考では、太宗による洛陽宮復旧にともない隋代から仏教の中心地であった洛陽の仏教僧衆の支持を得るため天宮寺が建立されたが、その建設地として天津橋を基点として洛陽宮と対称の位置にある洛南の高祖旧宅という地が選ばれたとする。当該墓誌を用いて唐代禅門北宗と天宮寺に関する問題を彫り起こそうとする方向性は有意義なものであるが、空間的配置および住人の生活と信仰を理解したとする点で、十分な説明が尽くされているのであろうか。

⑭雷闘氏の論考では、旧名凌空観が、睿宗の諡号に由来する大聖真観と改名した点、玄宗の妹玉真公主との関係において開元・天宝期の洛陽の宮殿大系に重要な地位を有することになる点を指摘する。また徳宗・敬宗の師である劉徒政との関係をもとに、大聖真観が洛陽の政治環境と密接に繋がった道教宮観の縮図であると認識する。隋唐の洛陽を理解する上で、日本の研究者の視座は仏教に偏りがちであるが、本論考は道教に視座をおいて洛陽の都市景観の復元を試みているという点で、その立ち位置そのものに今後求められる課題が看取される。

⑮榎本淳一氏の論考は、七世紀に増加する真身（ミイラ）の実例分析と真身信仰の発生時期・事由をとらえ、その上で、唐代密教の高僧であった善無畏三蔵の真身が何故に中国唐代末から北宋期にかけて人々の信仰を集め信仰の発生に至るのかという点を探究したものである。北宋に渡った奇然は洛陽龍門にて善無畏三蔵の真身を直接礼拝した。その奇然がもたらした中国における高僧の真身化と真身信仰の拡がりという情報が、日本における真身信仰導入の契機になったという指摘は、日本の古代中世仏教史を理解する上で極めて有益なものといえる。

特別寄稿

⑯黄建氏の論考を閲読するに、その日本における洛陽関連の研究目録には遺憾ながら漏れが数多あり、分類も正確になされてはいない。黄氏の専門は何処に存するのか。その専門性において日本の洛陽研究は如何なる立ち位置にあるのか、日本における洛陽研究の何を理解し、何を求めている論考・目録であるのか。就中、本論考冒頭の内容が評者には理解できない。果たして本書の方向性と意義に適う内容であるといえるのだろうか。

以上、本書に収められた論考は多様な内容を有していることから個々に詳述するには紙幅の余裕がないため、ここではその触りと私見を簡略に述べるに止めた。研究内容としては極めて豊富なもので、その多様性から今後隋唐の洛陽をめぐる基幹的な論集となっていくものといえよう。然れども、収載の論考の水準が必ずしも一定ではなく、十分な査読を経て、厳選されたもので構成され得たかという疑念を持ってしまう点が惜しまれる。仏教・宗教をめぐる報告が多かったことを注目すべき点として強調しているが、報告者の選定段階において、その傾向はすでに確定していたものといえる。とはいえ、総じて、それぞれの研究分野において特記すべき成果であることから、本書の隋唐研究、とりわけ当該期の洛陽研究に資するところは極めて大きい。その認識に立って本書の位置付けを考えてみるに、むしろ本書の価値は、その標榜するところの「洛陽学」の位置付けにあるといえよう。よって以下に、編者が提唱する「洛陽学」について、評者の視点からその意義と問題点を述べておきたい。

編者は「長安学」に相対する位置付けを与えるべきものとして「洛陽学」を提唱する。その行動力は洛陽研究に益するところ大なるものとして評価に値する。しかしながら、前に述べたように洛陽の歴史考古研究者の間ではすでに「河洛文化」「河洛学」というものが成立しており、それに係る研究成果を収載した『河洛春秋』なる期刊誌も刊行されていた（近年休刊）。洛陽という地域に縛った研究のみをとらえてみても、裴李崗より仰韶・中原竜山とつづく新石器文化をめぐる諸問題、二里頭を含めた王朝草創期たる夏殷周三代をめぐる諸問題、春秋戦国史を東周の視点からとらえる諸問題、漢魏洛陽城四〇〇年史をめぐる諸問題、そして本書の題目にもなっている隋唐洛陽をめぐる諸問題など、そのどれもが東アジアの中心として存在した洛陽を対象としたものであり、黄河、中原という環境の内にあって洛陽は論じるべきもので、「河洛」という名称の中にこそその意味が存すると考える。また、北宋で西京としての位置付けを有した洛陽、そして金代以降において縮小されていく洛陽も、中原という視野の中でその位置付けをとらえるべきものであろう。然るに、敢えて「洛陽」という名称に固執し視野を絞ってしまうのは何故であろうか。第二回シンポジウムに参加した毛陽光氏の所属先の名称も（洛陽師範学院）「河洛文化国際研究中心」である。「洛陽学」を提唱する前提として現地研究者の共通認識の内にある「河洛学」の存在を説明した上で敢えて「洛陽学」を提唱すべきではなかっただろうか。二〇一七年、洛陽にある河南科技大学でも「洛陽学」を冠したプロ

ジェクト「洛陽学国際学術研討会」が立ち上げられたことは先に触れたが、評者にも参加の打診があった。その主体となったのは洛陽の現場に立つ歴史・考古の専門家たちではなかった。その内容も「洛陽」を冠した多種多様な研究を集めた政治色の強いものであったことから、評者は参加を見送った。編者の序論で「二、中国における「洛陽学」の認識とその課題」として「洛陽学国際学術研討会」の概要が紹介されているが、そこにおいて注意すべきは「一、洛陽学の概念」の「(三) 洛陽の地（洛陽盆地）が生んだ歴史的な文化（学問）と洛陽学」で、「河洛文化」「河洛学」「洛学」をめぐる研究とは「研究対象、研究範囲、研究姿勢、研究方法、研究任務のいずれにおいても明確に違う」とされるところである。これを受ける「(四) 洛陽学に求められる重要研究項目」では（三）を棚上げにしている。編者もその方向性に対して理解が困難であるとして疑念を懐いている。編者も指摘するごとく、ここでの方向性は一地方史の風潮の流れの中にある政治的動向の反映であり、洛陽ひいては河洛という地は歴史的に他の地を凌駕するものであり、中国史の本質に迫る意義を有することから地域史の枠内に収まるものではない。この点、評者も全く同意見である。

論点を元に戻す。洛陽盆地では、現在のところ五つの都城址が確認されていることからも明白なごとく、洛陽史において隋唐の洛陽はその一部に過ぎない。本質的に河洛文化というむしろ隋唐以外の部分において洛陽の有する意義を明確にしていくことが今後求められよう。本書を通して隋唐時代を中心とする洛陽の諸問題が映し出されたのは確かである。しかし、歴史考古の面で学識的に成立している「河洛学」を棚上げにした「洛陽学」に納得のいく説明を付すのは難しい。「洛陽学」という名称で学識的に問題を提起した編者の功績は極めて大きいが、この難解な問題を如何に克服するか、編者の精力的な活動を以てすれば可となるに違いない。編者自らが巻末で指摘するように、「洛陽学」のさらなる地平を目指し、充実した視座に立ってより深い地平を探究していくことを期待している。

（法藏館　二〇二〇・三刊　A5　三九二頁　五五〇〇円）